

リアになります¹⁾。この部分の展示制作に当たったのが「部会 A」と呼ばれる専門部会でした²⁾。当部会には、原田敬一先生（佛教大学名誉教授）を監修者に迎えて、写真監修を井上祐子先生（政治経済研究所主任研究員）に担っていただきました。またミュージアムからは、田中聡先生（メディア・資料セクター長）と細谷亨先生（副館長）にご参加いただきました。部会での展示内容の検討はのべ数十時間にわたって行われ、解説文の一言一句にいたるまで最後まで監修していただきました。本展示部分はこのほか、総勢 20 名の内外の研究者の協力のもとで完成したものになります³⁾。

今回のリニューアルは国際平和ミュージアムにとって、創設以来の「全面」リニューアルになります⁴⁾。したがって変更点は多岐にわたりますが、本報告では、今回のリニューアルで旧常設展示から大きく変わった点を 2 点に絞ってご紹介したいと思います。ひとつは、今回のリニューアルで新設された「帝国主義の時代」の展示についてです。もう一つは、今回新たな展示アプローチとして導入された「個人の体験」の展示についてです。

2. 新設された「帝国主義の時代」

——東アジアの現在を見つめ直すために

まずは新設された「帝国主義の時代」の展示についてです。リニューアル前の旧常設展示「平和をみつめて」（地下 1 階）は、「十五年戦争」（前半）と「現代の戦争」（後半）に分かれて構成されていました。旧展示では、満洲事変からアジア・太平洋戦争までのいわゆる「十五年戦争」から展示が始まっていたために、「十五年戦争」以前の時代を直接扱うことができないという課題を抱えていました⁵⁾。今回のリニューアルでは、この「十五年戦争」以前の時代に展示をさかのぼり、「帝国主義の時代」から展示が始まっています⁶⁾。

リニューアル後の新展示では、展示の冒頭に「帝国主義に染まる世界」という演出映像が用意されています（写真 1）。この演出映像では、15 世紀の大航海時代から 19 世紀末のアフリカ分割にいたるま

国際平和ミュージアムのリニューアル展示について — 帝国主義・十五年戦争の時代を中心に —

大月 功雄

1. はじめに

今回の報告の課題は、国際平和ミュージアムが第 2 期リニューアルでどのように変わったのかについて、担当の学芸員から紹介することにあります。わたしからは、今回のリニューアルで担当した「帝国主義の時代」および「十五年戦争」の部分についてお話ししたいと思います。

「帝国主義の時代」と「十五年戦争」は、リニューアルされた展示のうち全体の前半部分に該当するエ

で、帝国主義諸国が世界各地の植民地獲得に乗り出していく様子が世界地図を用いて描かれています。こうした世界秩序の再編のなかで、東アジアでは何が起きたのかという問いから、その後、年表展示が1840年のアヘン戦争から始まり、日本帝国主義が東アジア各地を植民地化していく過程などがたどられていきます(写真2)。たとえば、ここでは台湾征服戦争や韓国併合、さらには琉球処分や蝦夷地の領有など、今日の沖縄やアイヌの方たちが抱えている問題の起点になっている出来事などが取り上げられています。なお新展示では、このアヘン戦争から始まる年表展示が、現在のウクライナ戦争にいたるまで、約180年にわたって展開されていくことになります。

今回、年表展示の「帝国主義の時代」に対応するかたちで特設コーナーとして設けられたのが、テーマ展示「帝国日本の植民地・占領地」です(写真3)。ここでは、かつて帝国日本の植民地ないし占領地であった6つの地域(台湾・朝鮮・南樺太・南洋群島・満洲・東南アジア)を取り上げ、それぞれの地域に生きた人びとの日常の経験に光を当てた展示となっています。本コーナーには、それぞれの地域を

生きた人たちの生の声に来館者が触れられる仕掛けとして、手記・回想資料などを用いた「めぐり」なども設けられています。

また展示中央には演出映像「帝国の拡大と人びとの移動」(写真4)が用意されており、この時代に東アジアにかつてない規模で生じた人びとの移動——内地から植民地、植民地から内地、あるいは植民地間の移動など——が映像で描かれています。このように本コーナーでは、とりわけ従来のナショナル・ヒストリーからは取りこぼされてきた、移住した日本人によって土地を奪われたり、移動を余儀なくされた、在日朝鮮人や樺太アイヌ、満洲や南洋群島の現地住民などの人びとの経験に焦点が当てられています。

このような「帝国主義の時代」を新設するためには、新たな資料調査や収集も不可欠でした。もともと当館の資料は、「平和のための京都の戦争展」や「若人の広場」コレクションをはじめとして、「十五年戦争」期の資料を中心に収集されてきました。そのため、「帝国主義の時代」の資料はいざ探してみるとなかなか少なく、しかし調査の過程では当館に所蔵されながらもこれまで展示されてこなかった新

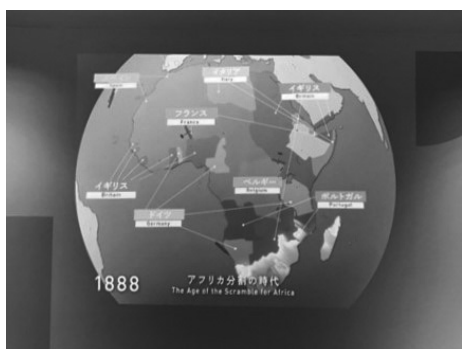


写真1 演出映像「帝国主義に染まる世界」



写真3 テーマ展示「帝国日本の植民地・占領地」



写真2 年表展示の冒頭「帝国主義の時代」

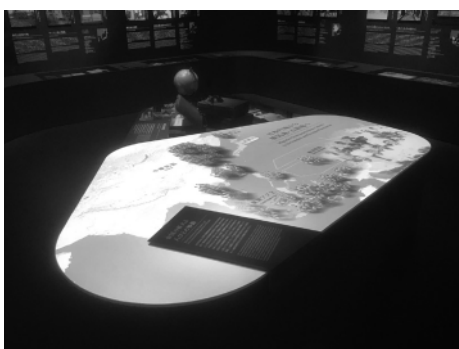


写真4 演出映像「帝国の拡大と人びとの移動」

資料もいくつか発見することもできました⁷⁾。また当館だけでは補いきれないところもあり、今回のリニューアルのための展示資料として、新たにご提供いただいた資料もあります⁸⁾。

では、そもそも当館には「帝国主義の時代」を扱うだけの資料が豊富に存在していたわけでもなかったにもかかわらず、なぜ今回のリニューアルで「帝国主義の時代」をわざわざ新設する必要があったのでしょうか。それはやはり、日本と東アジアの現在、あるいは未来を見つめ直すためには、少なくともこの時代から展示を書き起こさなければならないと考えてきたためです。

今回のリニューアルでは「植民地責任」⁹⁾という言葉が、ひとつのキーワードとなっていました。「植民地責任」は、これまで当館が大切にしてきた「戦争責任」の視座をさらに深化させ、日本の戦争の記憶を東アジアの戦争・植民地の記憶へと開いていく、そのような試みを表す言葉でもありました。すでに「帝国主義の時代」は現在から100年以上も前の「過去」になるわけですが、それはいまなお東アジアの現在、あるいは未来の平和創造のために不可欠な歴史認識であり続けています。たとえば、台湾有事などの軍事的緊張がいわゆるなか、台湾と日本、あるいは中国と日本は歴史的にどのような関係を切り結んできたのか。あるいは東アジアで高まる軍事的緊張のなか、さらなる軍備拡張が進められている沖縄とこれまで日本はどのような関係を結んできたのか。かつての戦争と植民地の記憶をめぐり、日本と中国・朝鮮半島との間に生じている歴史認識のずれというものが、これからの東アジアの平和創造のための障壁とならないために、わたしたちは積極的に「帝国主義の時代」にさかのぼってその記憶を開いていく必要があるのだと思います。

また「植民地責任」という視座は、「継続する植民地主義」すなわち現在もなおほかならぬこの「帝国主義の時代」に翻弄された人たちの歴史が続いていることも示唆するものでした。実際、資料調査や展示準備を進めるなかで、たとえば樺太アイヌの田澤守さんとお話をさせていただいたときには、自分たちはいまもまだ先住地の樺太に帰っていないし、

祖先の遺骨も返してもらっていないのだと、それがいまも続く現在進行形の問題であるということを教えてくださいました。また李順連^{イ・スンヨン}さんからは、この時代に翻弄された自分たちが在日朝鮮人の歴史に対する「無理解」というものが今日まで続いていて、それがいま日本社会のレイシズムとして目の前に立ちまわっているというお話を聞かせていただきました。

こうして今回のリニューアルでは、東アジアの平和創造のための不可欠な歴史認識として、またいまなお東アジアに生きる個人の人生を翻弄し続けている現在進行形の問題として、この「帝国主義の時代」が新設されたのでした。

3. 「個人の体験」の展示

——戦争の記憶を分かち合うために

今回のリニューアルで新たに導入されたのが、「個人の体験」という展示アプローチです。旧展示では「総体的」な展示解説を探究する必要からか、「個人の体験」をほとんど展示場内で取り上げてきませんでした¹⁰⁾。このような「全体史」を探究した解説文だったからこそ、創設から30年以上ものあいだ苦境の時代に耐え得る解説文であり続けてきたともいえます。しかし開館からすでに31年が経ち、戦後80年を迎えようとしているなか、戦争体験者から直接証言を聞く機会は、日本社会から本格的に失われつつあります。そのようななか、今回のリニューアルでは、「戦争の記憶を共有するミュージアム」¹¹⁾をコンセプトのひとつに掲げて、新たに「個人の体験」を積極的に展示に組み入れていくということが試みられました¹²⁾。来館者が、戦争の時代を生きた人びとに何があったのかを想像し考えるきっかけをつくることから、展示をふたたび始める必要があると考えたためです。

ではリニューアルされた展示では、どのような個人の声に触れられるのでしょうか。もちろん、「個人の体験」と一口に言っても、そこにはさまざまな個人の体験があります。わたしが担当した前半部分（帝国主義の時代～十五年戦争）だけでも、総勢60

人弱におよぶ固有名詞をもったさまざまな個人の声
が紹介されています（写真5）。この「個人の体験」
の展示のなかで意識されていたのは、とりわけ従来
の歴史のマスター・ナラティブや「大きな物語」か
らはこぼれ落ちていった「普通の人たち」の声とい
うものを積極的に取り上げるということでした。た
とえば、障害をもつ子どもを抱えながら空襲を生き
延びた森種子さんや、サイパン島で娘を日本兵に殺
された沖縄南洋移民の又吉良子さん、引揚げで家族
全員を失った満蒙開拓移民の近藤かつみさん、「敵
国人」となった日系アメリカ人のリチャード・カラ
サワさん、広島で原爆被害に遭った朝鮮人被爆者の
オン・ブニョン
厳粉連さんなど、展示場内ではさまざまな戦争体験
者の声が紹介されています。

このような「個人の体験」の展示は、近年の歴史
学におけるエゴ・ドキュメントやオーラル・ヒスト
リーへの関心の高まりとも共鳴しながら、当館のエ
ゴ・ドキュメント研究会を中心に、教員と学芸員、
そしてスタッフである大学院生・留学生が一緒に
なって、数百人におよぶ人びとのエゴ・ドキュメン
トと向き合いながら、「いま誰のどのような声を届
けるべきか」「どうすれば来館者の心に届くのか」
などと調査研究を重ねてきた成果でもありまし
た¹³⁾。

年表展示「十五年戦争」に対応したテーマ展示
「十五年戦争の加害と被害」では、今回新たに証言
映像を用いるかたちで、来館者が直接戦争体験者
の声に触れられる機会も設けられています（写真6）。
たとえばここでは、日中戦争の加害の体験を語る
鈴木良雄さんや、朝鮮半島での強制労働で負った傷を
語る尹昌宇さん、沖縄戦の集団自決で失った娘さん

たちを語る北村登美さんなど、3人の貴重な証言に
触れていただけます。

このなかの鈴木良雄さん（埼玉県・1916年生ま
れ）は、1941年9月に中国山東省で初めて民家を
焼き払った日のことを戦後繰り返して証言されてき
た方です（写真7）。その日、鈴木さんは民家のな
かに若いお母さんと赤ちゃんがいることを知りなが
ら、それでも民家に火をつけてしまったといいます。
そして、それが戦地で自分が壊れていききっかけと
なったのだと、鈴木さんは語ります。「一度やって
しまうと、どういうわけか人間の心境というもの
は、次から次へと悪いことがしたくなっちゃうんで
すね」。鈴木さんのような日中戦争の体験は、戦後
家族にすら語りにくい戦争体験のひとつであったと
思います。それでも鈴木さんは、このときの謝罪と
反省の気持ちから、自分が犯した「罪行」を語り継
いできたのだといいます。

この鈴木さんの証言映像を撮影されたのが、芹沢
昇雄さんでした。かつて芹沢さんは鈴木さんの証言
活動には必ずと言ってよいほど同行し、鈴木さんが
若い人たちを前に証言される姿などをホームビデオ
用のカメラで撮影してこられました。今回のリ



写真6 テーマ展示「十五年戦争の加害と被害」の映像展示

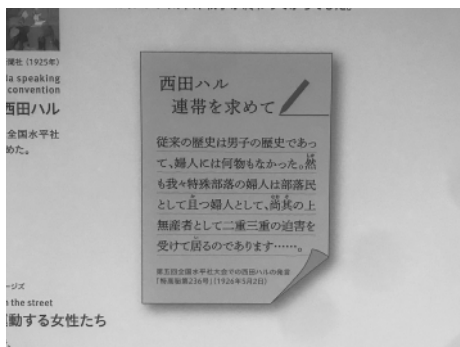


写真5 年表展示内の「個人の声」（西田ハルさん）



写真7 証言する元日本兵・鈴木良雄さん（2004年）

リニューアルでは、中帰連平和記念館に所蔵されている膨大な量の元日本兵たちの証言映像を調査させてもらいましたが、鈴木さんの映像はそちらの倉庫に長年保管されていたものの一つになります。今回わたしたちが鈴木さんの証言などに映像を介して向き合うことができるのも、こうした戦争体験者たちが証言する姿を後世に残そうとしてこられた方々のおかげにほかなりません。

また今回のリニューアルでは、「個人の体験」を物語る新たな資料も提供していただきました。たとえば、中国の夏淑琴さん（南京・1929年生まれ）からは『南京』という小冊子をご提供いただきました（写真8）。夏さんは、1937年12月13日、当時8歳だったときに、突如自宅に押し入ってきた日本軍に家族7人を殺され、妹さんと2人だけが生き残った経験をお持ちの方です。その日、夏さん自身も日本兵に銃剣の先でバツと布団をはがされて見つかってしまい、背中などを銃剣で刺され、生死をさまよう体験をされました。今回、南京の博物館で学芸員をされている芦鵬さんにご仲介いただき、夏さんが30年以上にわたり自宅で大切に保管されてきた報告集『南京』をご寄贈いただきました。

この報告集は、1991年に日本の市民が夏さんたち南京の市民の戦争体験を聞き書きしたものです。表紙には、銃剣でバツと布団をはがされた瞬間の、あの日の夏さんの顔が描かれています。夏さんはこのような凄惨な出来事を二度と繰り返してほしくないという気持ちから、南京を訪れた日本人に対して、本当は話したくもないはずのその悲痛な体験を語ってこられました。そして、みずから語ったその体験を、日本の市民が日本語で書き残してくれた



写真8 夏淑琴さん寄贈の『南京』

と、この冊子を大切に自宅で保管されてこられたそうです。

夏さんのような戦争体験者はどのような想いでその悲痛な体験を語り継いできたのでしょうか。またどのような傷を抱えて戦後を生きてこられたのか。新しくなった展示を通じて、来館者には戦争体験者や遺族の方々が大切に残してきた証言や資料の一つひとつと向き合いながら、「個人の体験」に想いを馳せていただければと思います。そして、いま現在も世界で続いている、わたしたち「普通の人びと」にとっての戦争の意味を考える機会にさせていただけることを願っています。

4. おわりに

最後に、今回リニューアルの現場のなかで一番強く感じたことは何かを振り返って、わたしからの報告を終えたいと思います。

今回のリニューアルは、立命館大学の関係者や展示会社はもちろんですが、学外の研究者や市民、平和博物館からの協力なしには、リニューアル自体が不可能だったと思います。こうした方々の国際平和ミュージアムに対する惜しめない協力は、これまで長年、このミュージアムを支えてきた方たちが築き上げてきた社会的信頼と期待があつたことだと、本当に行く先々で実感してまいりました。完成にいたるまでには、リニューアルのあり方やミュージアムの方向性をめぐり議論は何度も紛糾しました。実際、そのなかには看過できない出来事もいくつか起きていました¹⁴⁾。

そのようななかで、皆さんにご協力をいただきながら何とか作り上げた展示です。これまでリニューアルに向けて内々で議論してきたものが、ようやく皆さんに開かれます。ぜひ皆さんも、この新しくなったミュージアムにお越しいただき、国際平和ミュージアムの真価について一緒に考えていただきたいと思います。開館後、新しくなったミュージアムでお待ちしております。

【注】

- 1) リニューアル後の新展示は、年表展示を中心に大きく4つの時代——「帝国主義の時代」「十五年戦争」「戦後の世界」「グローバル化した現代」——に区分され、東アジアを中心とした近現代の戦争の歴史と平和を求めた人びとの歩みが描かれている。また新展示では、これらの年表展示の時代区分に対応するかたちで、4つのテーマ展示「帝国日本の植民地・占領地」「十五年戦争の加害と被害」「尊厳の回復を求めて」「人間の安全保障と国際平和」が設けられている。
- 2) 専門部会はそれぞれの時代区分に対応しながら、部会A（「帝国主義の時代」「十五年戦争」＝監修者：原田敬一、座長：田中聡）、部会B（「戦後の世界」＝監修者：大野光明・番匠健一、座長：加國尚志のち細谷亨）、部会C（「グローバル化した現代」＝監修者：吾郷眞一（座長）・君島東彦）に分かれて設置され、学内外の学識者を招いて、それぞれの時代の展示構成や解説文、展示資料の検討を行なった。部会Aは、原田敬一・佛教学大名誉教授の監修のもとで、2021年9・10月に展示構成案を作成し、2022年4月から2023年3月にかけて実質的な展示内容（解説文や写真・映像、展示資料など）の精査・検討を重ねた。
- 3) 部会Aでは、主に展示解説の執筆協力を中心に、以下の研究者の方々にご協力いただいた。吾郷眞一氏、飯高伸五氏、大谷正氏、長志珠絵氏、小澤卓也氏、勝村誠氏、河村晃祐氏、貴志俊彦氏、坂口満宏氏、千住一氏、竹野学氏、竹峰誠一郎氏、田中直氏、富山仁貴氏、平井健介氏、松田京子氏、宮内肇氏、森亜紀子氏、山口一樹氏、吉村和真氏。ここに記して、あらためて感謝申し上げたい。
- 4) 立命館大学国際平和ミュージアムは、第1期リニューアル（2005年）で2階の常設展示「平和をもとめて」の新設などを行ったが、地階の常設展示の全面リニューアルは今回が初めてとなる。第2期リニューアルにいたるまでの国際平和ミュージアムの沿革は、立命館大学国際平和ミュージアム編『立命館大学国際平和ミュージアム20年の歩み——過去、現在、そして未来』（2012年）に詳しい。
- 5) もちろん旧展示が「帝国主義の時代」を全く扱ってこなかったわけではない。たとえば旧展示の「植民地・占領地」部分では、帝国日本の植民地・占領地における戦争動員や抗日運動などが取り上げられてきた。だがそれらの展示はあくまで「十五年戦争」との関わりの中での展開にとどまっており、「十五年戦争」以前の植民地戦争や植民地主義の問題を正面から取り上げるものではなかった。
- 6) 第2期リニューアルにおいて「帝国主義の時代」および「人の移動」を重視するという方針は、「国際平和ミュージアム第2期リニューアル基本計画」（2020年）のなかでも次のように記されている。「19世紀末から21世紀の現在までの世界のつながり、グローバルな世界の変質、第一次大戦、第二次大戦を経て現在へと連続する歴史をダイナミックに提示し、アジア、日本、京都、個人の事象に迫れるようにする。その際に、帝国主義・植民地主義について、時間軸のみではなく、空間的な人間の移動（開拓移民、徴用工、学徒動員）も重視する」（11頁）。
- 7) たとえば、当館所蔵の『台湾守備日誌』（1901年）や『第二次台湾生蕃観光一行所感』（1911年）は、台湾征服戦争や台

湾原住民に対する植民地支配の様相を伝える貴重な資料として、今回新たに展示された資料である。このほか「日韓戦争」を描いた日清戦争期の錦絵「朝鮮京城戦争日本兵大勝利図」（1894年）や、日露戦争を生き抜いた樺太アイヌたちが自ら残した作品——山辺安之助『あいぬ物語』（博文館、1913年）と千徳太郎治『樺太アイヌ叢話』（市光堂、1929年）——など、今回のリニューアルで初めて光が当てられた当館所蔵資料も少なくない。

- 8) たとえば、京都における朝鮮人強制連行の歴史を物語る「丹波マンガン鉱石」は、今回のリニューアル展示のために丹波マンガン記念館の李龍植館長からご提供いただいた新資料である。
- 9) 「植民地責任」の視座から現代世界を捉える意義については、永原陽子編『「植民地責任」論』（青木書店、2009年）や永原陽子「植民地責任論」『新自由主義時代の歴史学』（歴史学研究会編、績文堂出版、2017年）などを参照。
- 10) 日本の平和博物館運動史における国際平和ミュージアムの歴史的位置づけについては、兼清順子「『平和と民主主義』のもとに」『なぜ戦争体験を継承するのか』（みずき書林、2021年）および山辺昌彦「日本の平和博物館の歴史と現状」『わだつみのこえ』（2022年12月）を参照されたい。
- 11) 今回のリニューアルで掲げられた基本コンセプト「戦争の記憶を共有するミュージアム」は、次のような問題意識に基づくものであった。「国際平和ミュージアム開館時、私たちは「東アジアの和解と理解を促進するための知識を提供すること」を掲げ、第1期リニューアルでは「平和創造」を打ち出した。……戦後70年を経て、戦争体験者が減少していくなか、どのようにしてその記憶を継承し、資料や証言を有効に展示に活かしていくか。……資料や証言を現代的な手法も交えて来館者に訴えかけるような新しい展示手法を検討する必要がある」（国際平和ミュージアム評議会「第2期リニューアル基本構想検討委員会報告」2019年3月13日、3頁）。
- 12) 今回のリニューアルで「個人の体験」にこだわる理由については、「国際平和ミュージアム第2期リニューアル基本計画」（2020年）が次のように論じている。「現在の国際平和ミュージアムの展示は戦争の歴史を綿密に学ぶ形になっている。しかし、博物館の使命としては、展示資料を通じて、来館者に「なぜ」という問いを喚起し、知的関心や倫理的問題意識を引き出してそこから教育的な効果を獲得するような、触発的性格が必要であろう」「歴史における一人称的個人の「語り（ナラティブ）」を重視する最近の歴史学の傾向などもふまえ、収蔵資料の持ち主であった個人の体験や物語（証言）を通じて、歴史を「特殊（個人）」と「普遍（社会）」の往還運動から立体的に理解していくことも必要である」「これまで常設展示では「個人の証言」を展示しておらず、それが特色でもあったが、新展示では、加害と被害の両面を持つ、移動する個人を取り上げ、個人と関連するモノ資料（所有物、日記、手紙等）のストーリーを提示する部分を作る。またサバルタン、レジリエンスといった観点も加え、国境を超えた「悲しみの人々」（People in Sorrow）、「闘う人々」（People in Struggle）といった観点からも展示を構成する」（「国際平和ミュージアム第2期リニューアル基本計画」2020年、8-9：11頁）。

- 13) エゴ・ドキュメント研究会は、2022年6月の第25回メディア資料研究会「博物館展示におけるエゴ・ドキュメントの可能性」(発表者：福井優・唐鈺・佐々木梓、コメンテーター：細谷亨)を起点として、大学院生スタッフの落合優翼氏・佐々木梓氏・唐鈺氏・峯桃香氏および学芸員の大月をメンバーとして、2023年3月までほぼ毎月開催された。今回のリニューアル展示の前半部分で紹介されている「個人の体験」は、かれらが数百人にもおよぶエゴ・ドキュメントを丹念に調査・検討し、数々の貴重な証言を展示候補に挙げてくれた成果にほかならない。
- 14) 本号巻頭言の市井吉興「立命館大学国際平和ミュージアム第2期リニューアルを振り返る：これからの「対話」に向けて」『立命館平和研究』(25号、2024年)では、その一端が触れられている。